



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ツガン=バラノフスキー 『國民經濟理論より見た資本制度秩序の崩壊』について
Author(s)	佐藤, 博
Citation	北海道大學 經濟學研究, 2, 141-166
Issue Date	1952
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30986
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_P141-166.pdf



ツガン・バラノフスキー『國民經濟理論 より見た資本制秩序の崩壊』について

佐藤 博

内 容

- 一、はしがき
- 二、ツガン崩壊理論の成立過程
- 三、ツガンの問題提起
- 四、ツガンによる、崩壊理論批判
- 五、結 論

一、は し が き

十九世紀の後半、ドイツ資本主義は「獨占」の段階に突入する。そこに、エンゲルスの死（一八九五年）後、所謂「修正主義」の發生の必然性があつた。

資本主義が、獨占、金融資本の征覇、帝國主義、と發展するにつれて、資本主義の「死相」 *memento mori* は、

世界資本主義諸國のより弱き一環においてますます現實化する。このような現實を「説明」しようとする試みの一つが、ベルンシュタインの「修正主義」となつて現われる。⁽¹⁾ベルンシュタインの根本の狙いは、マルクス・エンゲルスの「崩壊理論」を反駁することである。そのことはマルクシズムそのものを崩壊せしめるにも拘らず、彼は「修正」と稱した。かくては、「正統派」も黙つておれないので、カウツキーが「マルクシズムの擁護」に立ち上る。かくて「修正主義者」と「正統派」との間に、所謂「崩壊論争」が始まる。

この「崩壊論争」は、第一次世界戦争の前後において、カウツキー、ヒルファディグ、ローザ・ルクセンブルク、ブハーリン、グロスマン、と引き續いて行われた。

ところで、ツガンIIバラノフスキーの、經濟學說史上の地位は、「近代恐慌理論の父」として確立されている。彼の「崩壊理論」にかんする論文は、後に見るように、カウツキーの過少消費説の立場からする、ツガンの不比例説批判を、直接の契機として成立したものである。かくて、マルクスの恐慌論は、一方の極に過少消費説、他方の極に不比例説として切斷されるに至り、今日に至るまで對立を續けている。

この過少消費説對不比例説の論争は、わが國において、ローザ・ルクセンブルクの過少消費説をとる河上肇博士とツガンの不比例説による福田徳三博士との論争として再現され、「日本資本主義分析」の契機となつたことは、周知の如くである。

福田博士は、ツガンの「崩壊理論」の中に、「社會政策存在の理由」を發見される。また、ツガンのロシアにおける後繼者、コンドラティエフ Kondratieff は、景氣變動の中に、「長期波動」を發見し、資本主義の現實の運動を、「波動運動」に還元してしまつた。⁽⁴⁾これは、ワーゲマン、ミツチエル等の「景氣豫測學」Konjunkturprognoseを生み、一方、ツガンがJ・S・ミルから借りた、恐慌の原因としての「貨幣的要因」は、今日、シュムペーター、ハー

ン、ハイエクを始めとする、さまざまな「貨幣的景氣理論」を生んだ。

以上の始き、今日における意義を有するところの、ツガンの「崩壊理論」にたいする見解は、如何なるものであつたか？ われわれは、以下において、彼の『社會科學および社會政策アルヒーフ』誌上の論文、「國民經濟理論より見た資本制秩序の崩壊」(一九〇四年)⁽⁵⁾を中心に、考察して見よう。

- 註 (1) Vgl. Eduard Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie. 1899
- (2) Vgl. Karl Kautsky, Bernstein und das sozialdemokratische Programm. 1899
- (3) 河上肇、福田博士の「資本増殖の理法」を評す。「社會問題研究」一九二二年三月十六日、三一—三四冊。後に「社會組織と社會革命」一九二二年十二月に所収。
- 福田徳三、資本増殖の理法と資本主義の崩壊。「改造」一九二一年十一月。後に「社會政策と階級闘争」一九二二年一月に所収。
- (4) Vgl. N.D. Kondratieff, Die langen Wellen der Konjunktur, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. LVI. 1926. なお彼はロシア語でツガンの傳記を書いている。M.I. Tugan-Baranovsky. 1923. Petergrad.
- (5) Michael Tugan-Baranowsky, Der Zusammenbruch der kapitalistischen Wirtschaftsordnung im Lichte der nationalökonomischen Theorie. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XX. 1904. なお、この論文は、同年ロシア語で Krushenie kapitalisticheskogo stroya kak nauchnaya problema. Novyi Put 1904 として發表され、一九〇五年、Theoretische Grundlagen des Marxismus. 1905 Leipzig の第三篇に殆んどそのまま收録されている。ツガンの「崩壊理論」について、我が國で最初に研究されたのは、故大西猪之介博士であらう。大西猪之介經濟學全集第十卷、社會主義論(明治四十四年六月)参照。特に第五章第三節、第五款崩壊論は、ツガンの上記の論文の殆んど文字通りの紹介である。

二、ツガン崩壊理論の成立過程

ツガンシバラノフスキーが、その崩壊理論を世に問うに至つた過程を略述することによつて、われわれが、ツガンを特に取りあげた意圖が一そう明らかになるであらう。

ツガンの、一八六五年から一九一九年までのロシアにおける生涯こそ、ロシア資本主義の、發生・發展・消滅の、過程を背景としている。

ロシアは、他の西歐諸國に比して、遅れて資本主義的發展の道をたどることになつたので、封建的殘滓を充分に拭い去ることが出來ず、ロシア資本主義の深刻な生みの苦しみは、始めから、ロシア資本主義の「運命」をめぐつて、「悲觀論的」見解と、樂觀的な見解とが對立していた。とは云え、われわれは、悲觀もせず、樂觀もせず、ロシア資本主義の現實を、科學的な理論により分析し、その運命を正確に洞察していた、一群の人々を無視するものではない。

前者の「悲觀論的」見解を代表する人々は、「ナロードニキ」narodnikiと呼ばれ、樂觀論的見解を代表する人々は、「合法的マルクス主義者」legalnye marxistyと呼ばれている。

ナロードニキの見解（「ナロードニチエストヴォ」narodnichestvo）は、次の如く要約される。

- (1) ロシアでは、資本主義が發展し得ないと考えること。
- (2) ロシアにおける、農民と農民の「土地共有體」obshchinaの特殊性を認めること。
- (3) 社會の發展にかんして、科學的な理論を持たないこと。

第一の見解から、資本主義的發展を阻止せんとする「反動的怒號」が生ずる。

第二の見解から、科學的理論によつて造り出された、諸階級間の斗争にかする學說の適用を拒否したり、資本制經濟に固有な矛盾を否定することとなる。かくして、資本制經濟の矛盾の更に發展せる形態への連繫は否定されることに

なる。

第三の見解から、社會の經濟的發展の法則とは別の、發展の可能性を企圖する結果になる。かくして、この見解はシスモンディ流の「空想的」見解につながる。

ブレハーノフおよびレーニンなどの「正統派マルクス主義者」は、これらのナロードニキの見解と全く對立する。また、「合法的マルクス主義者」たる、ツガンバラノフスキー、ビョートル・ストウルヴェエ Pyotr Struve、セルゲイ・ブルガコフ Sergei Burgakoff なども、マルクス主義の衣裳をまとつて、ナロードニキに反對する。その故に、「正統派マルクス主義者」は「合法的マルクス主義者」と一時的協定を結ぶ。しかしながら、「合法的マルクス主義者」が、ナロードニキの「悲觀論的」見解を反駁するの餘り、資本主義の永遠の發展の可能性を主張するに至つては、ロシア資本主義と共に消滅すべき「運命」を有する、「正統派マルクス主義者」の單なる「同伴者」poputchniki たらねばならなかつた。

しかしながら、所謂「ロシアにおける資本主義論争」の口火を切つたのは、「合法的マルクス主義者」の一人、ストウルヴェエの、ダニエルソン(ニコライ——オン)の著書、「わが改革後の社會經濟の概要」Nik——on (Danielson, N.F.), Ocherki nashogo poreformennogo obshchestvennogo khozyaystvo. 1893 に對する批判であつた。⁽⁶⁾それは忽ちナロードニキの陣營に反響を呼び、ダニエルソンは「わが經濟的發展の諸條件にかんする或もの」Nechto ob usloviyakh nashego khozyaystvennogo razvitiya. Russkoe Bogatstvo. 1894. No. 46 なる論文で、これに應じた。

この論争の中に、わがツガンバラノフスキーは、「現代イギリスにおける産業恐慌」Promishlennye Krizisi v sovremennoy Anglii. 1894 をもつて登場する。

本書において、ツガンは、(1)ナロードニキの理論が「無條件的に誤り」であること、(2)資本制生産は、消費手段よ

りも、むしろ生産手段に頼りて、市場をつくり出すこと、(3)生産物乃至剩餘價值は外國市場がなくとも、實現可能なること、以上の三點を明らかにした。⁽⁸⁾

ツガンの著書が、ドイツ版として、「イギリスにおける商業恐慌の理論と歴史の諸研究」*Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England*, Jena 1901 なる標題を以て現われた時は、丁度ベルンシュタインらの修正主義が問題の中心となつてゐる時代であつた。ツガンは、當時既に、修正主義を我がものとなし、「マルクス主義からブルジョア經濟學に立ち歸るために」「殘る一步」を踏み出してゐた。⁽⁹⁾

ツガンの「諸研究」が、「極めて激烈かつ典型的な恐慌」⁽¹⁰⁾の最中に出版されたことは、「丁度時宜に適して」⁽¹¹⁾いるとなして、ドイツ社會民主黨の「正統派」の指導者カウツキーは、「ノイエ・ツァイト」*Die Neue Zeit* 誌上に、四號にわたつて、ツガン批判を試みるに至つた。⁽¹²⁾

カウツキーは、先づ自らの「過少消費説」を定式化して、「過少消費説」こそ『正統派』マルクス主義者によつて一般的に認められた、マルクスによつて基礎づけられた恐慌理論である、⁽¹³⁾と宣言する。

この「過少消費説」によつて、ツガンの恐慌理論を基礎づける表式は、「恐慌なしに消費の減退が起り得る、唯一の場合を示しているにすぎない。即ち、それは單純再生産から擴張再生産への過渡においてである。この唯一の場合がツガンにあつては、資本主義的現實の典型になつてゐる。しかも、それは資本主義的現實に於ては減多に起らない場合なのである」⁽¹⁴⁾と批判する。

更に、カウツキーは問題を提起して、「恐慌の性質が變化してゐるかどうか、變化してゐるとすれば、どの程度まで變化してゐるか」⁽¹⁵⁾と問い、これに對して、カウツキー自身は、恐慌が次第に激烈化し、「慢性的不景氣は大眾にとつて全く堪えがたいものとなる」時期、「この強制狀態 *Zwangslage* が不可避免的にやつてくると考へる」⁽¹⁶⁾と答えてい

る。

かくして、ツガンは、「唯一の場合」、「減多に起らない場合」というカウツキーの非難に答えねばならぬ。また、それと同時に、新たに提起された問題——崩壊理論——に對して自分の見解を明らかにせねばならぬ。

このようにして、出來上つたのが、われわれの以下において紹介を試る論文なのである。

註 (1) エンゲルスは「ダニエルソン（ニコライ——オン）宛ての手紙で次の如く書いている。「ロシアは、一八六一年を以つて大國民に相應した程度の近代工業の發展を開始しました。」（一八九二年三月十五日附。邦譯「マルクス」エンゲルス全集」第二卷、一七八ページ。）

(2) ナロードニキの一人、ヴォロンツォフの著書は「ロシアにおける資本主義の運命」Vorontsov, V.P. Sudby kapitalizma v Rosii, 1882 と名づけられている。

(3) エンゲルスは「ダニエルソン宛ての手紙の中で、ストウルーヴェを批判している。「ロシアにおける發展の現在の資本家的な段階は、私にとつてもまた、クリミア戦争によつて、一八六一年の農業變革の方法によつて、そして全く一般的にはヨーロッパにおける政治的な停滯によつて創り出されたところの歴史的諸條件の不可避的な歸結である限りにおいて私は彼（ストウルーヴェ——引用者註）を正しいとせざるをえません。しかし彼が、將來に關するあなた（「ダニエルソン——引用者註」の悲觀論的見解と彼が名付けるものを反駁するためにロシアの現在の狀態を合衆國のそれに比較する場合）は、彼は決定的に誤っています。」（一八九三年十月十七日附。同上「全集」一九三ページ。）

(4) cf. P.I. Lyashchenko, History of the National Economy of Russia to the 1917 Revolution. tra. by L.M. Herm. an. New York. 1949. p. 432.

(5) cf. Achille Loria, La controversa del capitalismo in Russia. Nuova Antologia. 1899.

など Vgl. Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. 1913. Kap. XVIII, R. Wagenführ, Die Konjunkturfurtheorie in Russland. Jena. 1929. 和田佐一郎「ツガン・バラノフスキーの恐慌論——恐慌論史の一齣として——

東北帝國大學經濟學會研究年報「經濟學」1（一九三四）參照。

ツガン・リベラノフスキー『國民經濟理論より見た資本制秩序の崩壊』について 佐藤

- (6) Peter von Struve, Zur Beurtheilung der kapitalistischen Entwicklung Russlands. Socialpolitische Centralblatt No. 11. Oct. 1893.
- (7) 本書の第三版は、「週期的産業恐慌」 Periodicheskie promishlennye krizisi. 1914. なる標題を持ち、フランス語版、Les crises industrielles en Angleterre. traduit sur la 2e édition russe revue et augmentée, par l'auteur par Joseph Schapiro. Paris 1913. によつてゐる。鍵本博譯「英國恐慌史論」はフランス版からの翻譯である。
- (8) Lenin, Bemerkung zur Frage der Theorie der Märkte. Marx, Das Kapital. besorgt von M-E-L-Institut. Bd. II Anhang. SS. 559—560.
- (9) Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals. Leipzig 1921. S. 280. Vgl. Lenin, Sämtliche Werke. Bd. III. S.9 Anm.
- (10) Tougan-Baranowsky, Les Crises industrielles en Angleterre. p. 178.
- (11) Karl Kautsky, Krisentheorien, Neue Zeit. 1901. 松井隆一譯編「マルクス恐慌理論」四ページ。
- (11 a) カウツキーのツガン批判については、和田佐一郎、ツガンの恐慌論を繰りて、東北帝大年報「經濟學」3（一九三五）参照。
- (12) 同上、四二ページ。
- (13) 同上、五六ページ。
- (14) 同上、六三ページ。
- (15) 同上、八二ページ。

三、ツガンの問題提起

ツガンの論文は次の言葉で始まつてゐる。

「唯物史觀の立場からすれば、社會のあらゆる發展は經濟的發展によつて規定される。社會革命を惹き起すものは

人間の意識ではなくて、物質的生活の諸矛盾であり、生産諸力と生産諸関係との衝突である。資本制経済様式の崩壊の必然性および、その社会主義的経済様式への轉化の不可避免性を立證するためには、そのために何よりも先づ必要なことは、ある特定の段階にある資本主義の存続の経済的に不可能なことに對して一つの有力な證據を提出することである。一たんかかる可能性が確定するならば、それとともに資本主義のその對立物への移行の必然性も立證され、かつ社会主義もユートピアの領域から科學の領域へ巧に移されたことになる。

そのことは、マルクスやエンゲルスが彼らの歴史哲學的見解の立場から彼らの社会主義的確信を基礎づけようと試みた際の、全く當然な思惟行程であつた。資本主義の存続の純粹に経済的な不可能性を示すこと——それこそ彼らにとつて主要事であらねばならぬ。何故なら、もしも資本主義のより以上の存続が経済的發展の諸法則に矛盾しないで、われわれの道德的意識とか或は人民大衆の意識された利害關心と矛盾するならば、それと同時に社会主義の必然性の有力な唯物論的證明も提出されないことになる、けだし史的唯物論の立場によると、道德でもなく、人民の大多數の利害關係でもなく、生産諸力の發展および、それに基づく経済様式の發展が社會的生活過程を規定するのであるから。」

これを要約すれば、次の三つの命題に歸着する。

一、唯物史觀は「經濟的發展」を決定的なものと見る、一つの「歴史哲學」である。

二、故に資本主義の崩壊とは、「純粹に經濟的に」資本主義が存続不可能なることを、「證明」せんとする「歴史哲學」の論理的歸結である。

三、資本主義の崩壊が、「純粹に經濟的に」ではなくて、「道德的意識」との矛盾から證明されるならば、「有力な唯物論的證明は提出されないことになる。」

これでツガンの論文の意圖が明らかになる。

すなわち、唯物史觀を、「人間の意識」と「物質的生活の諸矛盾」を切斷することによつて、「原因、結果を固定した互に對立した極」となし、「交互作用を全然看過する」という「普通の非辯證法的な觀念」に置き替える。⁽²⁾

次いで、「マルクスのお手本にならつた數學的表式、すなわち、我慢つよい紙の上の足し算引き算の計算練習」によつて、「資本制經濟は、それが或る特定の段階で何らかの不可能となりうべきところの、何の契機も自分の中に含んでいない」ことを「證明」する。⁽⁴⁾

かくして、資本主義の崩壊は「純粹に經濟的に」證明しえないことを「證明」したツガンは、だが「資本主義は無限の存續を豫期しうる」などと考えない。何故なら、資本主義は、われわれの「道德的意識」に矛盾するから。そのことを證明するために、ツガンはカントの倫理學の根本命題を借りてくる。かくして社會主義を「科學の領域」から「ユートピアの領域」に引き戻そうとする。⁽⁶⁾

そこで、ツガンの當面の「課題」は、從來の「資本主義の存續の純粹に經濟的な不可能性を示す」という、「崩壊理論」を取り上げて、これを批判することである。

註 (1) Tugan-Baranowsky, Der Zusammenbruch der kapitalistischen Wirtschaftsordnung im Lichte der nationalökonomischen Theorie. Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik. Bd. XX. 1904. SS. 273—274. 傍點はわれのもの。

(2) エンゲルスのメーリング宛ての手紙。一八九三年七月十四日附。(邦譯「マルクスIIエンゲルス全集」第二二卷、二六七ページ。)

なお、同じ手紙の中で次のように云つてゐる。「メーリングの『唯物史觀』には——引用者註——他に尙もう一點だけ缺けている。しかしこの點は、マルクスと私とのものに於ても、何時も十分に強調されていない、そしてこの點に關して

は我々すべてに等しい責任がかゝつてゐる。即ち我々は皆、先づ經濟的基礎事實から、政治的、法律的、及びその他の思想的な觀念並びにこれらの諸觀念によつて媒介せられる行動を導き出すことに重點を置いて來たし、また置かなくてはならなかつた。だがこの際我々は内容の方面は別として形式的方面——この諸觀念等が發生する様式方法——を等閑に附して來た。かくしてこれが、反對者に誤解にもつてこいひの機會を與えたものである……」(同上、二六五ページ。傍點はエンゲルス。)

- (3) Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals oder was die Epigonen aus der Marxschen Theorie gemacht haben 1921. S. 40.
- (4) Tugan-Baranowsky, A. a. O., SS. 303—4.
- (5) A. a. O., S. 304.
- (6) Vgl. Tugan-Baranowsky, Der moderne Sozialismus in seiner geschichtlichen Entwicklung. 1908. Vorwort.

四、ツガンによる、崩壊理論批判

最初に、ツガンの批判の對象になる「崩壊理論」の内容が、明らかにされねばならぬ。すなわち、如何なる理論を稱して、「崩壊理論」と呼んでゐるか？

ツガンは、マルクスおよびエンゲルスの「崩壊理論」に二つの「理論構成」を認める。一つは「資本制生産のための販路缺乏の理論」であり、他は「利潤率低落の理論」である。⁽¹⁾

第一のもの、「資本制生産のための販路缺乏の理論」とは、「過少消費説」のことなのである。マルクスおよびエンゲルスの「崩壊理論」が、「過少消費説」に基づいてゐることを立證するため、彼らの諸著作から引用を示す。

先づ、「資本制生産のための販路缺乏の理論」Ⅱ「過少消費説」は、エンゲルスの初期の論文——エルベルフェル

トの演説」(一八四五年)、および「イギリスの十時間法案」(一八五〇年)——において、「詳論され基礎づけられている。」⁽²⁾

「エルベルフェルトの演説」において、エンゲルスは「共產主義がドイツにとつて——たとえ歴史的必然でないにしても——一つの經濟的必然なることを證明すること」を課題とした。

「その證明は以下の如く行われた、」としてツガンは、エンゲルスの論文の内容を要約する。ドイツが、自由貿易か、保護主義か、何れかを選ぶものとする。もし自由貿易を選ぶとすれば、「ドイツの産業はイギリスの産業によつて亡ぼされ、そして大量の失業は社會革命を惹き起すであろう。」だが、保護主義を選ぶとすれば、「ドイツは國內市場を確保することは出来るが、國外市場において、イギリスと競争せねばならず、「より弱い競争者の没落」を以て終らねばならぬ。」⁽³⁾

「イギリスの十時間法案」においても、同様なことが唱えられている。すなわち「産業は、今日の發展程度においては、産業がその市場を増大しうるよりも、比較にならぬ程一そう急速にその生産諸力を増大する」結果、「その販路とは比較にならぬ程高度の膨脹力を有するイギリスの産業家の、急速度を以て落ち行くところは、その救済手段の盡き果てる時期」、「過剰生産が慢性的となる時期」である。⁽⁴⁾

次は、「反デューリング論」第三篇第二章より、——「ガスの膨脹力などこれに比べれば眞の兒戯に等しい大工業の巨大な膨脹力は、今やわれわれの眼前に、あらゆる反對壓力を物ともせぬ一個の量的および質的の膨脹欲としてその姿をあらわす。この反對壓力は、大工業の生産物に對する消費と販路と市場とによつて形成される。だが市場の膨脹力は外延的にも内包的にも、先づ全く別の、はるかに作用力の弱い諸法則に支配されている。市場の膨脹は生産の膨脹と歩調を合せられない。衝突は不可避免となり、しかもそれが資本制生産様式そのものを粉碎せぬ限り、何らの解

決をも生み出しえないので、週期的となる」⁽⁵⁾なる文章を引用する。

最後に、「資本論」第三卷、第三篇、第十五章より引用している。——「直接的搾取の條件とその實現の條件とは同一ではない。……前者は社會の生産力によつてのみ制限され、後者は、相異なる生産諸部門間の均衡により、また社會の消費力によつて制限されている。だが、この社會の消費力は、絶對的生产力によつても絶對的消費力によつても規定されないで、敵對的な分配諸關係——これは社會の大衆の消費をば多かれ少かれ狭い限界内でのみ變動しうる最少限に縮小する——基礎上的消費力によつて規定されている。」⁽⁶⁾

以上の引用の「基礎となつている理論」をツガン自ら、次のように「要約」する。

「資本制生産のための市場の範圍は社會的消費の範圍によつて規定される。生産物の量が社會的消費よりもより急速に増加するならば、作り出された生産物の一部分は賣れないに相異なる、かくして資本の一部分は増殖されないで留まらねばならぬ。過剰生産の状態が起り、そして資本は破壊される。資本制生産の發展はかゝる過剰生産を常に永續的ならしめざるをえない、けだしかゝる發展の際に社會的消費はただ極めて緩慢な擴張を遂げるだけであり、一方では生産はますます急速なテンポで増加するからである。かくして過剰生産が慢性的となり、しかも資本制經濟秩序が常に新たに蓄積しつゝある資本のより以上の價值増殖の不可能なことによつて崩壊するであろうところの時點がやつて來なければならぬ。」⁽⁷⁾

更に、ツガンは、「正統派マルクス主義者」にして、「現代マルクス主義のすぐれた代表者」カウツキーも、以上に述べた如き師の説——資本制生産のための販路缺乏の理論——に「忠實」なることを示し、「修正主義者」コンラート・シュミット Conrad Schmidt や、それどころか、「ブルジョア」經濟學者たち（レクシス Lexis、ヘルクナー Herkner、ホブスン Hobson、その他）すらも「經濟恐慌の最も重要な原因としての人民大衆の過少消費を是認」し

ている、と主張する。ここでは、ツガンは「崩壊理論と恐慌理論とを全然區別しない。」⁽⁸⁾

だが、ここでわれわれは、マルクス＝エンゲルスが、「經濟恐慌の最も重要な原因としての人民大衆の過少消費を是認」しているかどうかを、ツガンの引用せる文章によつて検討して見よう。カウツキー、シュミットが「過少消費説」をとることは、彼ら自身の言明するところであるから、ここでは、彼らについては論じない。

第一の引用——「エルベルフェルトの演説」——において、エンゲルスは、共產主義がドイツにおいて、「經濟的必然」なることを證明すると述べた。その文章に續けて、「われわれは先づドイツの現在の社會狀態を考察しよう。

われわれの間に多數の貧困が存在することは周知の事實である」として、「中産階級の貧窮化 Verarmung の増加と少數者の手中で集積せんとする資本の傾向とは、このプロレタリアートが數において常に増加せねばならぬことを吾々に保證する」と述べている。そして、この「原因は、競争が存在する限り」、「われわれが各々勝手に、他のすべての人々と對立して、生産を續ける限り、對じてプロレタリアートはただに存続せざるを得ないのみが、不斷に擴大し、吾が社會のますます恐るべき勢力とならざるを得ない。……

これこそ、吾が經濟學者が現在に至るまで未だ全然研究しなかつたところの、一問題である。彼らは國富の分配に關心を持たないで、かえつてその生産にのみ關心を持つ。だがしかしわれわれは、今まさに證明された如く社會革命一般が既に競争の結果であると云うことを暫く無視しよう。われわれは先づ、競争が據つて以て出現するところの個々の諸形態、すなわちドイツにとつての種々な經濟的可能を考察し、その各々の可能的結果がどうならねばならかを、見よう。」⁽⁹⁾として、ツガンの引用文に續いている。

資本制生産は「その獨特の、固有の、またそれと不可分の法則をもつ。そしてこれらの法則は、この無政府狀態にも拘らず、商品生産のうちに、商品生産を通じて、自己を貫徹する。それは社會的關連の存続する唯一の形態たる交

換において現われ、そして個々の生産者に對し、競争という強制法則としてはたらく。」⁽¹²⁾

この「競争という強制法則」の貫徹する結果として、人民大衆のプロレタリア化と、少數者の手中への資本の集中という、資本制生産の「基本的矛盾」こそ「崩壊」の「經濟的必然」なることを、エンゲルスは「證明」しているのである。

次の「イギリスにおける十時間法案」においても、上述の「基本的矛盾」が確認されている。すなわち、われわれは、同じ論文の中で、次の文章を見出す。「機械が不斷に進歩發展すること、並びに、これによつて條件づけられて資本および勞働力が不斷に排除すること、これらのことが、大工業の擴張を、強制する。」このような「競争という強制法則」の貫徹の結果、「週期的恐慌が起る。」⁽¹²⁾しかも、ツガンの引用では、「もし工業の發展が、同時に、次の時代に獨力社會の揮導に當りうべき階級——プロレタリアートを生み出すものでないとしたならば、」⁽¹³⁾と云う文章が故意に省略されて、「もしも社會革命が人間性を資本主義の袋路から解放する力たりえないならば、」と云う餘計な文章が附加されている。

第三の引用——「反デューリング論」——においても、その引用文にさき立つ次の文章を無視する。「われわれは如何に近代的機械裝置の最高度に高められた改良の能力が、社會における生産の無政府狀態により、個々の産業資本家にとつては彼の機械裝置をつねに改良して、その生産力をつねに高めねばならぬ強制命令に變ずるかを見た。」⁽¹⁴⁾その「機械裝置」こそ「勞働者階級に對する資本の最も強力な武器となり、勞働手段は勞働者の手から不斷に食糧をたたき落し、勞働者自身の生産物は勞働者を奴隸化する道具と變ずる、という結果を生む。」⁽¹⁵⁾

すなわち、ここでも「社會における生産の無政府狀態」が、一方では機械裝置を完成することによつて、生産力を高め、他方では、勞働者を「奴隸化」と云う「矛盾」が、「次第に狭くなる」「惡しき循環」を生む、ということ

が語られているに過ぎない。

最後の引用——「資本論」——こそは、レーニンによつて「マルクスはここで『資本論』の他の諸箇所においても明示されたところの資本主義の矛盾を、すなわち、生産を無制限に擴大しようとする欲求と制限された消費の必然性（人民大衆のプロレタリアの状態の結果として）との間の矛盾を確認しているにすぎないのである」と指摘された箇所である。

以上において見た如く、ツガンは、マルクス＝エンゲルスの「崩壊理論」は「過少消費説」であると解する。このように修正解釋せる理論に向つて「根本的に誤れるものとしての證明」にとりかゝる。

その「證明」は以下の如くなされる。

マルクス＝エンゲルスをはじめ、ブルジョア經濟學者すら、「過少消費説」を肯定するという點で一致するのは何故か？ ツガンはこれに答える。それは「生産」を「論理的概念」と把握して、「生産の唯一の目的は消費である」と單純に考えるところから生ずる。

ツガンによれば、經濟は「論理的範疇」ではなくて、「歴史的範疇」として把握すべきなのである。「經濟」を「歴史的範疇」として把握すると、「調和的經濟」harmonische Wirtschaftと「敵對的經濟」antagonistische Wirtschaftの二つの經濟集團がある。

「調和的經濟」の特徴は「經濟主體の人格と經濟的勞働者の人格とが一つの人格に一致すること」である。従つて、このような經濟では「生産の唯一の目的は消費である」といふ。そしてこのような集團に屬するものに1、自己生産、すなわち生産者の自分の使用のための生産、2、社會的分業に基づく獨立小生産者の交換經濟、3、

生産の指導が生産者たちの全體に所屬するところの、將來の社會主義的生産、がある。

「敵對的經濟」の特徴は「經濟主體の人格と經濟的勞働者の人格とが一致しないということに存する。」これには
1、奴隸制度、2、封建制度、3、資本制經濟制度がこれに屬する。

「敵對的經濟」にあつては、經濟主體としての人格と、經濟の單なる手段たるにすぎない經濟客體の人格というふうに分離する。

例えば、敵對的經濟制度の一つとしての、奴隸經濟においては、その經濟主體は奴隸支配者であり、奴隸自身の消費が目的ではなく、奴隸の消費は單なる手段にすぎない。それ故奴隸は、他の生産手段と異ならない。そのことは「奴隸經濟の最高の目的を何ら侵害することなく、他の生産手段によつて代置される」ということが、示している。もし土地を耕作するのに、奴隸を使用するより、馬を使用する方が、より生産力を高めるならば、奴隸は馬によつて代置される。それに従つて、奴隸の消費するライ麦の生産は減少し、馬の飼料たる燕麥がより多く生産される。かくして「ただその全體中の人間の消費のみがより少くなる、そのことは奴隸經濟の均衡を決して攪亂しないであらう。」⁽¹⁸⁾

奴隸制度から資本制經濟制度に移つても、「敵對的經濟」たる點で、事情は變らない。すなわち、「社會的生産の擴大は社會的消費の減退と連携して進行する、生産物の供給と生産物に對する需要は、だが一つの完全な均衡に留まる。」⁽¹⁹⁾ツガンの表式はそのことに對して、「嚴密な數學的證明」⁽²⁰⁾を與える。その表式に、「資本制蓄積の最も重要な契機」たる機械による勞働者の代置を考慮に入れるとしても、「万一全ての勞働者が、たつた一人に迄減少し、しかも機械によつて置き替えられたとしても、このたつた一人の勞働者は尨大な量の機械を運轉し、その助けをかりて新しい機械——および資本家の消費手段——を造り出すであらう。勞働者階級は消滅するであらう。そのことはちつとも資本の價值増進過程を攪亂しないであらう。」かくして「資本制經濟秩序の崩壞および、その社會主義的經濟秩序へ

の移行を強制されることはない。⁽²¹⁾

ここでわれわれは、ツガンの「證明」を検討して見よう。

ツガンは、カウツキーの「唯一の而も減多に起りえない場合」という非難に答えるため、ツガンの理論にとつて「最も都合の悪い場合——勞賃の不斷の・しかも著しい減退および資本家の消費に何ら増加のない場合の資本の蓄積⁽²²⁾」が、何ら擾亂なく進行することを示すため、新しい表式を作製する。だが、ツガンの「ともかくもマルクスに依據して構成された」と稱する表式の「使命」を、ツガンは全然、理解していない。けれど、ツガンは表式が何らかの「結論」を證明すると考えているからである。しかし「表式そのものは、なにもものにも證明することはできない。表式は、過程の個々の諸要素が理論的に解明されているとき、その過程を圖解することができるにすぎない。」⁽²³⁾しかるに、ツガンの表式は、資本の蓄積過程の「個々の諸要素」を「理論的に解明」しようとししないで、何らかの「結論」を證明しようとする限り、その表式を分析することは、何ら意味ないことであろう。この故に、われわれは、ツガンの表式を取り上げない。

ただ注目すべきは、經濟を「論理的範疇」と「歴史的範疇」とに區別するという、ツガン獨特の方法論である。

周知の如く、「論理的なもの」と「歴史的なもの」の切斷は、新カント派的方法論の特徴である。これは必然性の支配する自然界と、自由を原理とする倫理的な世界を絶對的に區別するカントの傳統をひくものである。

このような「論理的なもの」と「歴史的なもの」の切斷という、新カント派的方法論は、ツガンの全著作を貫いている。例えば、彼の名著「英國恐慌史論」(第三版一九一三年、初版一八九四年)においては、「恐慌の歴史」と「恐慌の理論」とが、はつきり區別され、「歴史」は「事實の研究」であり、「記述的」に「叙述」するものとされ、これ

に反して、「理論」には「理論的研究」しか認めていない。⁽²⁵⁾ また「マルクス主義の理論的基礎」『Theoretische Grundlagen des Marxismus 1906』においても、その序文で「抽象的社會經濟理論は資本主義の具體的歴史および發展傾向から區別すべきである」と言明されている。更に、マルクス主義と限界効用學派の「綜合」を試みた「分配の社會理論」『Soziale Theorie der Verteilung 1913』においては、利潤を「經濟の論理的範疇としての利潤」と「經濟の歴史的範疇としての利潤」に分類している。⁽²⁶⁾

然らば、「論理的なもの」と「歴史的なもの」との切斷は、如何なる歸結を生ずるか？ ツガンにあつては、經濟を「論理的範疇」と「歴史的範疇」とに分けることによつて、「調和的經濟」と「敵對的經濟」の區別が生ずる。そして、「敵對的經濟」にあつては「生産は消費から獨立している」という歸結を引き出す。勿論、資本制生産が剰余價值の生産、すなわち、生産のための生産が本質をなすことは、われわれも、否定しない。⁽²⁷⁾ しかし、だからと云つて「生産が消費から獨立している」ということは云えない。消費は「間接的」に生産に結びついている。ところが、資本制生産は、ツガンの認める如く、生産的消費の無限のない擴張欲求を持ち、他方において、——これはツガンの認めない點であるが——人民大衆のプロレタリア化が固有のものであり、ここに資本制生産の「基本的矛盾」があるのである。この矛盾こそ、資本制生産が、より發展せる形態に移らねばならぬ、歴史的過渡的形態にすぎないことを示すものである。

ツガンは、この「矛盾」を認めない。かくして、「論理的範疇」と「歴史的範疇」との新カント派的區別は、ツガンを必然的に倫理的「崩壞理論」に導く。

次に、ツガンの、第二の「理論構成」——利潤率低落の法則——の批判に移ろう。

ツガンは、利潤率の傾向的低落の法則が、「労働價值説」の論理的歸結であると考ええる。すなわち、労働價值説によれば、剰余價值は可變資本のみによつて作り出される。不變資本は可變資本よりも急速に増大するので、資本の有機的構成が高度化することから、利潤率の低落が起る。「しかるに、資本蓄積は中止しえないので、新たな資本の投下は、社會的利潤の量を高めることが出来ない場合、生産は、既に投下された資本の休止および資本の絶對的過剰生産に導く。かくして利潤率の低落は資本制生産の一制約をなす。」⁽²⁵⁾

これが、ツガンの理解する「利潤率低落の法則」による「崩壊理論」なのである。

ツガンは、利潤が「可變資本のみによつて作り出される」ということに反對する。彼は不變資本も可變資本と同様に利潤を生むと考える。⁽²⁶⁾（この點で、セーの「生産的奉仕説」と何ら異らない。）だが、ツガンは、この法則を「內在的」に批判せんとする。従つて、「利潤率の傾向的低落の法則」が、労働價值説の論理的歸結である以上、「ただ労働價值説と結びつき難いことが確定されることによつてのみ、傾向としても存在しないことが究極にに證明される。」⁽³⁰⁾

その「證明」は、またしても「表式」一點ばりなのである。⁽³¹⁾

「労働價值説」に依據して「內在的」に批判せんとする筈のツガンが、何故マルクスと異なる記號（不變資本を P 、可變資本を a 、利潤——剰余價值でなくて——を r で示す）を用い、Ⅰ、生産手段の生産、Ⅱ、労働者用消費手段の生産、Ⅲ、資本家用消費手段の生産、という三部門説を採るか、われわれには理解しえない。

だが、ツガンの論旨をたどつて見よう。

彼は「先づ第一に、マルクスの問題提起が間違つている」⁽³²⁾と主張する。何故なら資本の貸銀部分の相對的減少は、労働生産性が減少する場合と、逆に上昇する場合と、二つの場合から起りうる。ところが、マルクスは、労働生産性

の上昇の場合における利潤率を論じようとして、労働生産性の減少の場合——その場合にのみ利潤率は低落傾向を示す——を論ずるという「取り違い」⁽³⁴⁾ *inb. prob. onb. onb.* を犯してしまつた。だが、ツガンの「表式」によれば、労働生産性の上昇の場合は「利潤率の低落ではなくて、上昇への傾向を生ずる」ということを證明する。⁽³⁵⁾

マルクスは、不變資本は可變資本より急速に増大する、そのことより利潤率低落の法則を引き出したが、「不變資本の増加は如何なる方法で生ずるか——それについては、彼は追加資本が、恰も天からでも降つて來たかのように、黙つてしまふ。だがわれわれは、研究すべき過程を、そのあらゆる段階において、すなわち始めから終りまで分析するのであらう」とツガンは豪語する。そして、「始めから終りまで」⁽³⁴⁾ 勝手な「假定」の下での、「數學的計算練習」を繰返している。マルクスにあつては、可變資本が不變資本より相對的に減少するということは、「資本論」の第一巻において、既に明らかにした「資本制生産様式の一法則」⁽³⁵⁾ なのである。かくして、マルクスの利潤率低落の法則は「資本制生産の現實の傾向を表現する。」事實、ツガンは過少消費説批判において、資本制生産は消費手段よりも生産手段をより多く生産することを認めたのでなかつたか？

また、ツガンは労働生産性減少の場合と、労働生産性上昇の場合との二つの「表式」を掲げているが、前の表式では、「資本主義的現實により接近するために」と稱して、労働者の實質賃銀を一〇パーセント切下げ、後の表式では「『賃銀鐵則』の信奉者と看做されないように」と云つて、實質賃銀を一〇パーセント上げてゐる。このような「假定」を變更した數學的「計算練習」にあつては、利潤率が低落したり、上昇したりするのが、當然であらう。要は、ツガンとマルクスとが、どちらが「資本制生産の現實」を示しているか、である。

以上見たように、ツガンは「崩壊理論」の二つの「理論構成」を完全に拒否する。だが、資本主義が「無限の存

「崩壊」が可能とは考えない。資本主義の「崩壊」の「純粹に經濟的」證明が不可能なりとするツガンは、何によつて「崩壊」を「證明」せんとするか？ 残る途は唯一つ——經濟學に「倫理的規範」を持ち込むことによつて果される。

ツガンは云う。「資本制經濟が、自己目的であるべき労働者を單なる經濟的手段たらしめる」と。これは、カントの云う——「人間および一般にあらゆる理性的存在は目的それ自體として實存する、従つて單なるあれこれの意志のための勝手な使用のための手段としてではなくて、自分自ら理性的存在たらんと目指すも、他によつて理性的存在を目指すも、すべてのそれらの行動の中に同時に目的として看做されねばならぬ」——「根本的倫理的規範」に矛盾する。それ故、資本制經濟は、「鐵の如き（ただし經濟的でない）必然性を以つて」崩壊せねばならぬ。⁽³⁹⁾ 従つて、プロレタリアートは、この「矛盾」を意識し、社會主義的「理想」に向つて「鬭争せねばならぬ」。⁽⁴⁰⁾ 以上が、ツガン自身の「崩壊理論」の「理論構成」である。

註 (1) Tugan-Baranowsky, Der Zusammenbruch u.s.w. S. 275.

(2) A.a.O., S. 275.

(3) A.a.O., S. 275. Gesammelte Schriften von Karl Marx und Friedrich Engels, Zweiter Band, 1902. SS. 393—399. 本書は後に示す Aus dem literarischen Nachlass の間違ひではないかと思われる。リヤザノフ編の同名の論文集は初版が一九一七年である。ページ数もメーリング編と一致してゐる。

(4) Tugan, A.a.O., S. 276. Gesammelte Schriften von Marx und Engels. III. Band. SS. 389—394.

(5) Tugan, A.a.O., S. 276. Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. Dritte Aufl. 1894. S. 296.

(6) Tugan, A.a.O., S. 277. Marx, Das Kapital. III/1 SS. 225—232.

(7) Tugan, A.a.O., S. 278.

- (8) A.a.O., SS. 278—279.
- (9) P.M. Sweezy, The Theory of Capitalist Development. 1949. P. 195.
- (10) Engels, Versammlungen in Elberfeld. Aus dem literarischen Nachlass von Karl Marx und Friedrich Engels. hersg. von Franz Mehring. Zweiter Band. 4.Aufl. 1923. SS. 393—395.
- (11) Engels, Anti-Dühring. 11.Aufl. 1921. S. 351.
- (12) Engels, Die englische Zehnstundenbill. Aus dem literarischen Nachlass. Dritter Band. 4Aufl. 1923. S. 389.
- (13) Engels, A.a.O., S. 394.
- (14) Engels, Anti-Dühring S. 296.
- (15) A.a.O., S. 295.
- (16) Lenin, Bemerkung zu Frage der Theorie der Märkte. Marx, Das Kapital. besorgt von M-E-L-Institut. Bd. II Anhang S. 562.
- (17) Tugan, A.a.O., S. 279.
- (18) A.a.O., SS. 281—283.
- (19) A.a.O., S. 286.
- (20) A.a.O., S. 289.
- (21) A.a.O., SS. 289—290.
- (22) A.a.O., S. 284.
- (23) A.a.O., S. 283.
- (24) Lenin, Bemerkung. u.s.w., S. 566.
- (25) cf. Tougan-Baranowsky, Les Crises industrielles en Angleterre. 1913. Préface.
- (26) S. 49.
- (27) Vgl. Marx, Das Kapital. III. SS. 271—272.
- (28) Tugan, Der Zusammenbruch u.s.w., S. 294.

ツガンニバラノフスキー『國民經濟理論より見た資本制秩序の崩壊』について 佐藤

(62) Vgl. Tugan-Baranowsky, Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England. Jena, 1901. S.18. Anm.

(36) Tugan, Der Zusammenbruch u.s.w., S. 295.

(31) ツガンの表式については、藤田均「利潤論」河出書房、第十章を見られたい。

(32) Tugan, Der Zusammenbruch u.s.w. S. 296.

(33) A.a.O., S. 302.

(34) A.a.O., S. 296.

(35) Das Kapital. III. SS. 239—240.

(36) Tugan, A.a.O., S. 297.

(37) A.a.O., S. 299.

(38) A.a.O., S. 304. Kant, Grundlegung der Metaphysik der Sitten, Herausg. von Kirchmann. 1897. S. 52.

(39) Tugan, A.a.O., S. 304.

(40) A.a.O., S. 306.

五、結 論

眞の科學としての經濟學の窮極の目的は、資本制社會の運動法則を明らかにすることである。詳言すれば、特定の社會的有機體の發生、發展、死滅、および、より高度の他の有機體による元の有機體の交替、を規制する、特殊的諸法則を明らかにすることである。従つて問題なのは、これらの法則そのものである、頑強な必然性を以つて作用し、かつ自己を貫徹するこれらの諸傾向である。

われわれの問題とする「崩壞理論」なるものは、資本制經濟秩序の、より高度な、他の秩序への移行の法則を、現

實の資本主義的發展過程の中から、つかみ出すことでなければならぬであらう。その法則が、一方において、機械をますます完成し、他方、その機械によつて排除された労働者階級が、産業豫備軍に編入され、「絶對的貧困化」をもたらずというように現實の、いはば生活的な矛盾として把握されなければならぬのでなかろうか？それ以外に、絶對に見込みのないことを前もつて、表式の勝手な計算に基いて、「證明」せんとするのは、誤つてゐる。しかるに、ツガンは、從來の「崩壊理論」が、この種の「證明」をなさうとしたことは「確か」なのであり、その「證明」に、二つの「理論構成」を認めている。一つは「資本制生産のための販路缺乏の理論」であり、他は「利潤率低落の理論」であるという。前者は「過少消費説」のことなのであり、眞の科學としての經濟學の「崩壊理論」を「過少消費説」に置き換えることにより、的なきところに矢を放つてゐる。かくして、生産物の需要と供給の「形而上學的均衡」を「證明」することによつて、セーの「販路説」に立ち歸る。

ツガン自身は、機械による労働者の排除が、「資本制蓄積の最も重要な契機」たることを承認しておきながら、その排除された「労働者階級の運命」が、どうなるか、一言も觸れていない。それどころか「資本主義の最近の發展段階においては、實質賃銀の著しい上昇によつて特徴づけられる」と述べてゐる。⁽¹⁾一體誰の「實質賃銀」が上昇するか？ たつた一人だけ残つた、その労働者の「實質賃銀」ではないだろうか？

資本制生産の無政府性は、「競争という強制法則」によつて、資本の有機的構成をますます高める（これは同時に労働の社會的生産力の累進的發展を示す別個の表現なのである）このことは利潤率を低落せしめんとする傾向を有す。この「法則」に對するツガンの批判なるものは、全く現實に即しない「假定」の下に作られた「數學的計算」にすぎない。そして、この「假定」をさまざまに變更することによつて、「利潤率の上昇傾向」と云う「結論」を「證明」しているのである。併し、數學的に「證明」されたということは經濟學的眞理たるの資格をになうということと同じ

ことなのであろうか？

「實質賃銀の著しい上昇」、「利潤率の上昇傾向」にも拘らず、ツガンによれば、資本制經濟秩序は「崩壊」せねばならぬ。何故なら、資本主義は、労働者階級を「目的」ではなく、單なる「手段」と看做しているから、ツガンの「倫理的規範」に矛盾するから。

かくして、經濟學に「倫理的規範」を持ち込むことによつて、ツガンは彼の新カント派的方法論を貫くことは出来たけれども、それと同時に、資本主義の「良い方面」と「悪い方面」とを區別するところの、ブルードンと一緒に、「科學の領域」から「空想の領域」に逆戻りせねばならぬ。⁽²⁾

註 (1) Tugan-Baranovsky, Der Zusammenbruch u.s.w., S. 288.

(2) ツガンには、「ブルードン、その生涯と業績」Prudon ego zhizn i deyatelnost 1891 なる著書のあることを附け加えておく。

一九五二年二月。